

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530763  
 研究課題名 (和文) 大学ユニバーサル化時代に対応した新しい高大接続モデルの構築  
 —加と豪を素材として—  
 研究課題名 (英文) The Study on the Articulation Between Secondary and Tertiary  
 Education in Canada and Australia  
 研究代表者  
 佐藤 智美 (SATO SATOMI)  
 東洋英和女学院大学・人間科学部・教授  
 研究者番号：80240076

研究成果の概要 (和文)：本研究では、カナダとオーストラリアという単線型の中等教育制度を採る国 (州) に着目し、スムーズな高大接続の可能性を探ることにした。我が国の高校多様化政策と大学入試多様化政策の帰結が高校での学習内容の拡散と「受験シフト」の先鋭化を招いたことを踏まえると、高校での成績評価に基づく大学入学システムが適している。長期的には、カナダのオンタリオ州やオーストラリアのクイーンズランド州を参考にすれば、高校の成績に基づく大学入学システムが大学ユニバーサル化時代にふさわしい高大接続モデルの1つであるといえる。

研究成果の概要 (英文)：This study examines the articulation between secondary and tertiary education in Canada and Australia in order to reconsider entrance examination to universities in Japan. We found that entrance into university based on student's secondary school performance would be more preferable at the universal stage of higher education today.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：大学入学、高大接続、大学ユニバーサル化、カナダ、オーストラリア

## 1. 研究開始当初の背景

(1) わが国の大学短大進学率は、2005年度には51.5%に達している。いわゆる大学ユニバーサル化段階に到達したのである。また、収容力との関わりから希望者がほぼ全員大

学に入学できる「大学全入時代」を迎えている。

荒井(2000)によれば、学校システムの量的構造の変化(ピラミッド型から台形型への変化)により、かつては入学試験により高校と

大学の接続関係をつけることができたが、もはや、入学試験によって接続関係をつけることは不可能になっている。今日では、進学率の上昇に加えて、「大学全入時代」という点からも、大学志願者のインセンティブとして入学試験は機能し得なくなっているのである。つまり、試験接続によって、大学入学者の学力水準は一定程度保障されてきたが、大学生の学力低下問題に代表されるように、もはや入学試験は学力水準の保障装置としても十分には機能していない。したがって、入学試験といういわば「試験接続」方式に替わる接続方式を創り上げることが、ユニバーサル化段階を迎えたわが国では喫緊の課題となっているのである。

(2) 連携研究者である山村が参加している「試験研究会」のメンバーの一人、藤井は、フランスにおける接続問題の分析において、ヨーロッパ型の大学入学者選抜制度から学ぶべき点は、大学入学資格試験が同時に中等教育修了資格試験を兼ねている点にこそあると論じている(荒井 2005)。このような国の典型としてわれわれの頭にすぐに浮かぶのはフランスのバカロレア(Baccalauréat)とドイツのアビトゥーア(Abitur)であろう。この両国の制度は、いわば「教育接続」によってリセやギムナジウムと大学の接続を、学力保障も含めて、基本的にはスムーズに実現している事例と言える。

## 2. 研究の目的

わが国の接続問題への示唆を得る方法として、「比較」という方法に着目するならば、フランス・ドイツ以外にも、「教育接続」を実現している国はないのか、そしてそのような国々から、フランスやドイツからとは異なる示唆が得られるのではないかと考えられるのである。ここで研究代表者等が注目したいのは、中等教育の歴史的発展段階とその位置づけという分析視角である。

各国の初等・中等教育の歴史的発展との関わりから見れば、中等教育と高等教育の接続に関する制度的設計は、当然のことながら、一様ではないと考えられる。たとえばドイツやフランス、イギリスなど、中等教育がもともと高等教育への「予備課程」として中産階級のためのものとして位置づけられてきた。一方、初等教育は、一般大衆の子どもを対象として、中等教育との接続が位置づけられてこなかった。これらの国、とりわけ、ドイツやフランスでは、中等学校卒業(資格)が大学入学資格として位置づけられていた。したがって、こういった中等教育に限られた者を対象としている限り、基本的に「高大接続問題」は、制度設計の観点からは、存在していなかった。それゆえ、今日、後期中等教育および高等教育の進学率の上昇とともに、従来

のアビトゥーア(ドイツ)やバカロレア(フランス)といった、中等学校卒業(修了)資格試験=大学入学資格試験という古い制度設計思想に基づく試験を、いかに現状にふさわしく改変するか、が課題となっているのである。

カナダとオーストラリアでは、州ごとに学年制等の相違はあるものの、初等・中等教育は単線型をとっている。しかも高等教育就学率はかなり高い。たとえばカナダではカレッジ、専門学校または総合大学の教育を受けた成人の割合(53%)が高く、米国、イギリス、フランスを含む他の経済協力開発機構(OECD)加盟国の水準を超えている(カナダ大使館広報部 n. d.)。さらに、国際的な学力調査においても、カナダやオーストラリアはともに上位に位置している。これらの両国は、従来、とりわけ大学入学者選抜・高校と大学との接続という観点からはほとんど研究が行われてこなかった。しかしながら、上記のような大学ユニバーサル化の流れのなかで、大いに注目すべき国なのである。

上記のような研究の学術的背景を踏まえ、本研究では、オーストラリア・クイーンズランド州とカナダのオンタリオ州の中等教育制度および大学入学者選抜制度、および高等教育制度を分析することによって、両州の高大接続システムの構造および特徴を明らかにし、大学ユニバーサル化時代にふさわしい「教育接続」モデルの1つを提示することが本研究の課題である。

## 3. 研究の方法

### (1) 平成19年度

カナダのオンタリオ州を対象にして、オンタリオ州教育省、オンタリオ大学志願センター、大学等を訪問し、中等教育カリキュラムの内容および中等教育政策、オンタリオ州における大学進学手続き、大学における入学者選抜のプロセスについて把握した。

### (2) 平成20年度

オーストラリアのクイーンズランド州を対象にして、クイーンズランド学習局、グリフィス大学、中等学校等を訪問し、中等教育カリキュラムの内容および中等教育政策、クイーンズランド州における大学進学手続き、進路選択過程、大学における入学者選抜のプロセスについて調査・研究を行った。

### (3) 平成21年度

クイーンズランド州を対象にして、クイーンズランド教育省、ロングリーチ中等学校、ロングリーチ遠隔教育学校、ケルビン・グループ・カレッジ、アルバニー・クリーク中等学校等を訪問し、州の進路選択指導政策、クイーンズランド州における大学進学手続き、進路選択過程について調査・研究を行った。

#### 4. 研究成果

(1) カナダ・オンタリオ州の学校制度と大学入学者選抜

##### ① オンタリオ州の学校制度

オンタリオ州の学校制度は6歳からの初等教育(8学年まで)、9学年～12学年までの中等教育、その後の高等教育の3段階に分かれている。義務教育は6歳から16歳までである。公用語は英語であるが、第一言語が英語でない子どもにはESL(English as a Second Language)が提供されている。小学校では、1学年から8学年までの教育を行っている。中等教育では、英語、フランス語、数学、理科、カナダ史、カナダの地理、社会、保健体育、芸術、公民、キャリア・スタディの必修のほか、アカデミックかビジネスか技術系の中から選択した科目を学習する。中等教育を修了するとオンタリオ中等教育修了証書(Ontario Secondary School Diploma, OSSD)が授与される。このOSSDを取得することが高等教育への進学に必要なものとなる。

高等教育は24の専門的カレッジ、3つの農業カレッジ、1つの園芸カレッジ、the Michener Institute for Applied Health Science、20の大学(University)、などからなっている。大学(University)に進学するためには、オンタリオ大学志願センター(Ontario Universities' Application Centre, OUAC)に志願し、その後各大学が可否を決定する。わが国のような各大学における入学試験は実施されない。

##### ② オンタリオ中等教育修了証書(OSSD)

OSSDを取得するためには、9学年から12学年の間に、18単位を必修科目から、12単位は選択科目から履修することになっている(なお、1つの科目について110時間の授業で1単位である)。これらに加え、10学年において州の統一識字テスト(後述)に合格することがOSSD取得の要件になっている。これは、英語の基礎学力の徹底をはかるためである。さらに、最低40時間の地域参加活動(ボランティア活動)が義務づけられている。

中等学校9学年と10学年においては、アカデミック、応用、オープン型の3タイプのコースが置かれている。このうちオープンコースはすべての生徒向けであるが、アカデミックコースは理論的、抽象的な内容に焦点を絞っているコースである。このコースは11学年や12学年になった時に大学進学や大学・カレッジ進学の準備する生徒のためのコースである。応用コースは実践的な応用と具体的な内容に焦点を絞って学習する。このコースは11学年と12学年で職業準備コースに進む生徒を前提としている。なお、応用コース9学年からアカデミック10学年にコース変更

を希望する生徒のために、橋渡しとなる教材も用意されている。

次いで、11学年と12学年の生徒は4つのコースの中から進路を選ぶ。4つのコースとは職業準備コース、大学・カレッジ準備コース、カレッジ準備コース、大学準備コースである。まず、職業準備コースは中等教育後、すぐに職業につくため、または見習い生になるため、または地域内のその他の訓練生になるための準備コースである。大学・カレッジ準備コースは特定の大学やカレッジの入学要件を満たすように計画されており、理論と実践的な応用が重視されている。カレッジ準備コースはほとんどのカレッジのプログラムへの入学要件を満たすように編成されており、実践的な応用と基本的な諸理論を学ぶことが重視されている。さらに、大学準備コースは大学の入学要件を満たすのに必要な知識、技能を提供するコースである。なお、中等教育後の計画を変更しようとする生徒にはコース変更が可能である。そのような生徒達は、夏季講座などの編入コースで学習する。

中等学校の各科目についての基準は、オンタリオ州が定めているが、それぞれの科目に、「オープン」「アカデミック」「応用」「大学」「大学・カレッジ」「カレッジ」「職業準備」の区別がなされている。大学進学希望者は、11学年・12学年で「大学」「大学・カレッジ」の科目を履修する必要がある。

##### ③ 中等学校から大学へ

大学への志願は、OUAC(オンタリオ大学志願センター)を通して行う。OUACとはオンタリオ州の大学への入学志願書を処理することを主な機能とする機関である。OUACは個人的な入学に関するデータに加え、入学者を決定できるように、大学が要求している他の情報をも集め、処理している。現在95%の志願は、オンラインで行われている。OUACは可否の決定にはかかわらず、各大学が決定する。多くの大学の場合、可否は、直接、志願者にオンラインで送られ、志願者はオンラインで入学意思を送る。

以上、特に大学入学者選抜との関わりからは以下のような特徴を指摘できる。①高校は、内部でのコース別の進路分化の方式をとっている。②個別の大学入試はなく、基本的に高校の成績に基づいて選抜が行われる。③大学への志願に関する事務は、一括して、オンタリオ大学志願センター(OUAC)が行っている。この点は、大学志願事務の効率化をはかる上で、効果的であると思われる。

(2) オーストラリア・クイーンズランド州の高等教育進学と進路選択過程

##### ① クイーンズランド州の中等教育と進路選択

中等教育は、7年間の初等教育の後、8年

生から始まり 12 年生までであるが、クイーンズランド州の法律によって、10 年生が終わるまで、あるいは 16 歳になるまでが義務教育となっている。しかしながら、さらなる学習あるいは収入を得ることに参加することが義務となっている。これをクイーンズランド州では、Learning or Earning と呼んでいる。すなわち、法律によって 2006 年に 10 年生になった生徒からは以下のような形で教育や職業訓練に参加しなければならない。

- ・ 10 年生修了後さらに 2 年間 または
- ・ クイーンズランド中等教育修了証書 (Queensland Certificate of Education: QCE) を得るまで
- または
- ・ 職業資格証明書 (Certificate III) を得るまで または
- ・ 17 歳になるまで

クイーンズランド中等教育修了証書とは 2008 年から従来の上級修了証書 (Senior Certificate) に代わって導入された修了証書である。QCE は、生徒にとってはさらなる教育、あるいは職業訓練のどちらかに進むための基礎を作り、将来の雇い主に対しては生徒の能力の範囲を知らしめるものでもある。多くの生徒は 12 学年の終わりに QCE を受け取るが、QCE を取得する条件を満たさない生徒は、QCE 取得に向けた学習を継続することができる。

クイーンズランド州では、10 年生になると教師や親の援助のもとに SET プラン (Senior Education and Training Plan) を作成する。SET プランとは 11、12 年生の学習のための個々の学習進路を精密に計画するものである。

さらに、クイーンズランド州では、毎年、学習局が 12 年生を対象としたクイーンズランド・コア・スキルズ・テスト (Queensland Core Skills (QCS) Test) と呼ばれる州共通のテストを実施している。テストの結果は A から E の 5 段階評価で示され、生徒の上級学年報告書 (Senior Statement)、あるいは結果報告書 (Statement of Result) に記録される。テストは 1 年に 1 回 2 日間に渡って実施される。テストで出される問題は標準的なオーストラリア英語での基礎的レベルの一般知識や語彙そして 10 年生の数学力に相当する。クイーンズランド学習局自体はテスト準備にかかわることはないが、準備用の過去問題などを用意している。

## ②高等教育進学

クイーンズランド州では、生徒はまず OP (Overall Positions) を得ることによって、高等教育進学への道が開かれる。OP とは、生徒の学習局科目 (Authority Subjects: 高等教育志願のために認められている科目) の全体的な成績に基づいたクイーンズランド州

独自のランクであり、他のすべての生徒と比較してその生徒の相対的位置を示すものである。OP を得るためには、学習局科目の 20 学期分の単位を修得しなければならない、少なくとも 4 学期間開講される科目を 3 つ含んでいなければならない。こうして OP の資格のある生徒は 1 (最高) から 25 (最低) まで 25 の OP に区分される。また、FP (Field Positions) は OP の資格がある場合にのみ算出される。FP は OP を補強するもう 1 つのランクであり、field を表す F は中等教育カリキュラムで重視される領域を示している。FP はある OP 区分に属する生徒たちを差別化しなければならないような、たとえば、コースの定員を超えて志願者があるような場合に、高等教育機関が使用する。

クイーンズランド州における大学入学志願はクイーンズランド高等教育入学志願センター (Queensland Tertiary Admissions Centre: QTAC) を通して行い、入学者の選抜も QTAC が各高等教育機関の入学条件に照らし合わせて行うことになっている。QTAC の役割は集中方式化した高等教育入学システムを提供し、将来の志願者に対して包括的な情報を出すことである。QTAC に参加している教育機関はその入学要件や選抜基準の決定は独自に行っている。それらが決定されると、QTAC の役割の 1 つは入学規則やそれに関連した手続きが正しく履行されるようにすることである。QTAC を通して志願するには、志願者はオンラインで行うが、6 つのコースまで志願できる。

## ③大学進学

将来希望する職業によっては、大学へ進学することが必要になるものもある。10 年生の段階で 3 年後に入学する大学のコースの要件を満たすように SET プランを設計し、科目を選択しておかなければならない。訪問したファーニーグローブ中等学校では、2 人のガイダンス・オフィサーが科目選択について親身に相談に乗ってくれる。2008 年に 10 年生である生徒にとって、3 年後の大学進学のための重要な情報源の 1 つであるのが、QTAC から無料で配布される『高等教育必須要件 QTAC 2011 (Tertiary Prerequisites: QTAC 2011)』という冊子である。これをみると、全体が 3 つのセクションに分かれており、まずセクション 1 では、大学で学ぶために知っておかなければならないことが記されている。その中には、QTAC への志願の仕方や入学者選抜方法、そのために算出される OP や FP についても説明されている。セクション 2 は生徒自身が最も関心のある領域やキャリアとして従事してみたい領域について簡略に説明されている。最後にセクション 3 では、生徒の関心のある領域に関連した大学におけるコースが教育機関別に書かれており、それを見れば、

進学したいコースの科目要件などが明らかになる。このように、現10年生向けにQTACから配布される3年後を見据えた冊子本も重要な情報源の1つとなっている。

クイーンズランド州の調査から、2007年に12年生を卒業した者の約半年後の進路をみると、大学へ進学した者が34.4%、職業資格を目指して訓練を受けている者が26.2%で、合計60.6%の者が何らかの学習か訓練を継続している。また、フルタイムでの就労が17.4%、パートタイムでの就労が14.7%で、仕事を探している者と学習にも仕事にも関わっていない者がそれぞれ5.8%、1.5%である。このような12年生卒業後の進路の本格的な基礎は中等学校教育の後半に計画的に形づくられる。大学進学は確かに最も多い進路であるが、それは中等教育の最終目標ではなく、キャリア形成のための選択肢の1つである。クイーンズランド州の中等教育は子どもたちに職業を中心とした人生の生き方を考えさせ、計画させるために、特に10年生から12年生段階では学校内外の人々の協力を得て、時間が有効に使われている。子どもたちを「自分は何が好きなのか」「何が得意なのか」「何に興味があるのか」等々の問いに直面させ考えさせ、実社会に参加しつつそれらの問いに答えていく。その際には、親をはじめ、教師、ガイダンス・オフィサー、職業人からの協力と助言が子どもたちを支えている。特に企業や職業人からの協力はその種類や数も多く、子どもたちにとって選択肢は豊富である。選択肢が適切でなかったり、不向きであると判断されたならば方向を転換すればよい。それを人生の中のどこでも可能にする基礎を中等教育段階で形成する。その証に、先にも述べたように、オーストラリアでは生涯のどこかで大学に進む者の割合が60%を超えているのである。

### (3) 高大接続モデル

ところで、我が国の高大接続の現状に関して、以下のような問題点を指摘できる(山村2010)。

高校教育課程の分析からは、進学率中上位校の高校教育は、受験シフトによって細分化された教育課程により、「大学教育に接続する高校教育ではなく、入試方法に接続する高校教育」(荒井2008、8頁)となっており、一方、進学率低位校では、推薦入試・AO入試を中心とする入学方法下で、教育内容的に大学教育へはもちろんのこと選抜方法にも接続しない高校教育になっているともいえるのである。これを導いた要因の1つに大学入試の多様化と高校教育の多様化が指摘できよう。

また、大学での学びに必要な技能(スキル)が高校でどの程度身につけているかの分析結果によれば、「体系化・構造化」、「分析・

評価・結論」、「創造・発表」といった、より高次の技能において高校で身についた程度と大学での必要度の間でのギャップが大きい。これらの大学での勉学に必要なが不足している技能は、「知識やスキルを現実の文脈で使いこなす力(つまり思考力・判断力・表現力・応用力といった『高次の学力』)」(田中2005、70頁)に含まれるものであるといえよう。

したがって、我が国の高校と大学の改善のための課題として、受験シフトを防ぐこと、および、「高次の学力」を身につけられるような教育課程の改革が必要とされることになる。ここで、大学入学者選抜制度に焦点化すれば、オンタリオ州とクイーンズランド州の選抜制度からどのような示唆が得られるであろうか。両州の大学入学者選抜制度の最大の特徴は、入学試験を実施せず、後期中等教育の最後の2年間の成績に基づいて選抜をすることにある。

オンタリオ州では、教科ごとに州統一カリキュラムが設定されている(平田2007)<sup>1)</sup>。たとえば11年生(我が国の高校2年生に相当)で学ぶ「大学進学向けの数学」において、12の評価項目の下にさらに合計67のより詳細な評価項目が設定されている。また、知識・理解、思考、コミュニケーション、応用の4つのカテゴリーにおいて合計で11の評価規準(criteria)が決められ、それらの達成水準が文章にて4段階で示されている。また、各単元等では、パフォーマンスにもとづく評価方法が重視されている(Ministry of Education, Ontario 2007)。

また、クイーンズランド州でも大学進学に認められる科目に州統一カリキュラムが設定されている。その中には、詳細な評価規準が設定され、それらの達成水準が文章にて5段階で示されている。また、高等教育や職業生活、社会生活において有用な能力・学力であるコンピテンシー(competency)を獲得させることを意図している。さらに、成績評価の公平性・比較可能性を保つためには何段階にもわたるモデレーション(moderation:調整)のシステムが設けられている(Queensland Studies Authority 2005)。

両州では、明確な学習達成目標を設定し、達成度を評価規準に沿って評価する仕組みが作られているのである。さらに、大学入学者選抜とのかかわりからは、一定の幅広い科目の高校成績を選抜資料とするとともに、志願する専攻分野・コースごとに修得すべき科目(オンタリオ州およびクイーンズランド州)と到達すべき水準(クイーンズランド州)を大学は指定している。一定の幅広い科目の高校成績を選抜資料とすることは、我が国に則していえば、受験シフト的学習を防ぐということになる。また、クイーンズランド州に

注目すれば、高校での当該科目の到達度を最低限の大学入学要件として明示しているということなのである。

また、成績評価のための詳細な基準が設定されており、コンピテンシー(competency)を獲得させることを意図していることやパフォーマンスにもとづく評価方法が重視されていることは、知識などの評価とともに上述の「高次の能力」の評価を継続的に重ねることで、大学入学者選抜のための資料ともなっているということなのである。

このように、受験シフトを防ぎ、なおかつ「高次の能力」評価も行い得るようなシステムとして高校成績に基づく大学入学者選抜が考えられる。これが、今後の我が国の高大接続モデルの1つとなりうるであろう。ここでは、高大接続モデルの基本的な枠組みの提示に留めざるを得ないが、両州のカリキュラムの内容と成績評価システム、および、成績評価の学校間の公平性・比較可能性を保障するためのモデレーション(moderation:調整)のシステム、および、中等教育段階における進路選択・分化のシステムを分析することにより、より具体的な像を描くことが今後の課題である。

なお、より広い視野で高大接続問題を捉えれば、中等教育と高等教育・中等後教育をどう制度設計するかがきわめて重要である。ここでは就職希望者・進学希望者を問わず「学校から職業社会への移行」をどのように実現させるかが、核心的なテーマの1つとなる。視野を広げて、「学校から職業社会への移行」という課題のなかに、まず中等教育・高等教育・中等後教育を位置づけること、そして高等教育進学希望者にも「職業社会への移行」を念頭において「進学」を位置づけることが不可欠である。

## 引用文献

- 荒井克弘(2000)「高校教育と大学教育との接続」荒井克弘(編)『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部、1-23頁。
- 荒井克弘・橋本昭彦(編著)(2005)『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版部。
- 平田淳(2007)「カナダ・オンタリオ州における子どもの学力向上政策—統一カリキュラムと学力テストに焦点を当てて—」大桃敏之・上杉孝實・井ノ口淳三・植田健男(編)『教育改革の国際比較』ミネルヴァ書房、94-110頁。
- カナダ大使館広報部(n. d.)『カナダと教育』カナダ大使館広報部。
- Ministry of Education, Ontario (2007) *The Ontario Curriculum Grades 11 and 12: Mathematics*, Ministry of Education,

- Ontario.
- Queensland Studies Authority (2005) *Moderation Processes for Senior Certification*, Queensland Studies Authority.
- Queensland Tertiary Admissions Centre (2008.) *Tertiary Prerequisites: QTAC 2011*, Queensland Tertiary Admissions Centre.
- 田中耕治(編)(2005)『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房。
- 山村滋(2010)「高校と大学の接続問題と今後の課題—高校教育の現状および大学で必要な技能の分析を通して—」『教育学研究』第77巻第2号、(印刷中)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ①佐藤智美、山村滋、カナダ・オンタリオ州の学校制度と大学入学者選抜、大学入試フォーラム、査読無、第30号、2007、46-54頁。
- ②佐藤智美、山村滋、オーストラリア・クイーンズランド州の高等教育進学と進路選択過程、大学入試フォーラム、査読無、第31号、2008、53-65頁。
- ③山村滋、高校と大学の接続問題と今後の課題、教育学研究、査読有、第77巻、第2号、2010、(印刷中)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 智美 (SATO SATOMI)  
東洋英和女学院大学・人間科学部・教授  
研究者番号：80240076

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

山村 滋 (YAMAMURA SHIGERU)  
独立行政法人 大学入試センター  
研究開発部・教授  
研究者番号：30212294